総合的な学習の時間を核とした教科横断的授業の構想
－新聞を活用したＮＩＥの実践－

中村正成・七木田俊*，田代高章**
*岩手大学教育学部附属中学校，**岩手大学教育学部

（平成 31 年 3 月 4 日受理）

１．はじめに

本校では，学校教育目標である「よく考え，誠をもって働く人間」の具現化を目指し，総合的な学習の時間を「ヒューマンセミナー(略称:ＨＳ)」と称し，主に体験活動（学年プロジェクト）を柱に，全ての教育活動を包括的な学びの場と捉え実践に取り組んでいる。ヒューマンセミナーでは，学習のねらいを「生徒自らが課題を見つけ，その課題を追究していく中で, 自己の生き方を考える」ことを重点に置き，それぞれの学年で共通学習課題を設定し，年間を通してその課題解決に迫る学習を行っている。平成２９年度告示の学習指導要領においても，総合的な学習の時間の目標において，自己の生き方を考えていくために,「実社会や実生活の中から問いを見いだし，自分で課題を立て，情報を集め，整理・分析して，まとめ・表現することができるようにする」ことを育成することを謳っており, ヒューマンセミナーの考え方は, それに則ったものであると考えられる。

しかし，ヒューマンセミナーにおいて様々な講師の先生方の話を伺いながら，人としてどのように生きていくかということについて迫ろうとしているが，共通学習課題に迫ること，つまり「自己の生き方を考える」ことに比重が大きくなり，実社会の中から生徒が主体的に課題を見つけたり，教科等の学習を生かしながらその課題を分析したりするというような側面が弱いところに課題が見られる。本研究は，総合的な学習の時間において教科横断的な授業を展開し，生徒が主体的に課題意識をもって取り組む総合的な学習の時間の授業づくりはどうあるべきかを追求したものである。

２．方法

本研究は，３学年で行われる学年プロジェクト「学習旅行」に向けた学習の中に，他教科やＮＩＥの視点との関連をもたせることで，生徒の学習をより深めることを狙ったものである。なお，本研究は第２３回ＮＩＥ全国大会盛岡大会の公開授業にて提案したものである。本研究の目的を達成するために，以下の４点の方法を用いる。

（１）学習旅行における事前学習の資料集めとしての新聞活用
（２）各教科の視点をもった学習旅行個人テーマの設定と調査活動
（３）学習旅行の学びの成果の新聞紙面での発信
（４）（１）～（３）を包括した教科横断的な単元デザイン

３．授業の実際

（１）学習旅行における事前学習の資料集めとしての新聞活用

今年度の学習旅行地は福岡県であった。北九州市の「シャボン玉石けん」社長の森田隼人氏,「安川電機みらい館」館長の岡林千夫氏，朝倉郡東峰村の重要無形文化財保持者「小石原焼」の福島善三氏，福岡市の重要無形文化財保持者「献上博多織」の小川規三郎氏をはじめ,「北九州マイスター・技の達人」や小石原焼の窯元の方々のお話をうかがい,「『新しい社会に生きる』とはどのようなことか」という共通学習課題のもと，学習を行った。

学年プロジェクトにおいて，現地に向かう前に

は，これまでもインターネットを用いて調査活動をしてレポートにまとめる活動を行っている。今回の学習旅行の事前学習では，これに現地の新聞社である西日本新聞を加えながら調査活動を行った。調査活動において西日本新聞を用いることで，現地のより深い情報を入手することができる。例えば，九州北部豪雨から１年が経過するが，西日本新聞の紙面を見ると現地の人々の現在の生活や官民それぞれの取り組みなどが多く掲載されており，復興関連の情報が現地の人々にとって非常に重要度の高いものであることがうかがえる。また，当然のことながら現地の企業や人物を採り上げている記事も多く，学習旅行の訪問地についてより確かな情報を得る上では非常に有効なメディアであると考えられる。生徒は，滅多に見られない現地の新聞を興味深く広げ，これから向かう福岡県について理解を深めようとしていた。

タイ経済 再興への道 上

現状打破

九州企業に熱い視線

双腕ロボットが肉まんを数十個ずつ次々と運んでいた。タイ南部チョンブリ県にある同国を代表する食品メーカーCPフーズの冷凍食品工場。男性従業員は「私たちの大事な仲間です」と笑顔で話った。

ロボットには「YASKAWA」の文字。安川電機（北九州市）製を示す。昨年10月に導入され、完成した肉まんを包装ラインに移す仕事を担う。従業員の手作業だったが肉体的負担が重く、ロボットを導入した。

CPフーズによると、ロボットへの多額の投資には、政府の支援策を活用した。海外から精密機械を導入する場合に必要な輸入税は免され、法人税の減免措置も受けられる。同社マネジャーのウンパ・ポンさんは「後もロボットは増えていくだろう」と見込む。

■　■

タイ政府は2015年、今後20年の経済政策のビジョン「タイランド4・0」を打ち出した。労働集約型産業から脱却し、高度化を進めるのが目的だ。CPフーズのような生産性向上を図る投資に加え、バイオやロボットなど先端技術を持つ海外企業の進出にも手厚い優遇策を設ける。国内企業育成と共に、海外企業の技術導入や投資を促す。

西部にあるのは経済の伸び悩みだ。1960年代以降、日系自動車産業などの進出が相次ぎ「東洋のデトロイト」と呼ばれるなど発展を遂げ、2016年の国内総生産（GDP）は東南アジア諸国連合（ASEAN）で5位の4千億ドル（約43兆円）。ただ近年は人件費上昇などに伴い、外資はベトナムなど周辺国に向かう。成長率は0～3％台で推移し、成長には陰りが見える。

タイの食品工場で稼働する安川電機のロボット

安価な労働力に中所得国へと成長したものの、先進国と競うには技術力が乏しい。成長が頭打ち、高所得国に到達できない「中進国のわな」に陥った状態だ。

ビジョンに基づき現状を打破し、30年代半ばの高所得国入り を目指す。政府機関「タイ投資委員会」（BOI）幹部は「技術革新で先進国になりたい」と力を込める。

■　■

「経済的な競争力を上げ、アジアの飛躍に中心的な役割を果たす」

3月下旬、バンコクで開催された政府主催の投資セミナー。国内外から集まった企業経営者、投資家約3千人の前で「経済政策を取り仕切るソムキット副首相が宣言した。続いて各県知事が、空港の増強や高速鉄道・道路の整備など企業活動の円滑化に向けた施策を発表。投資額は今後5年で5兆円に達するという。

ソムキット氏の発表の先にあるのが九州だ。大分県発祥の地域おこし「一村一品運動」に国家事業として取り組んだ。

「安川電機のロボットやJR九州の観光列車、医療、バイオ、自動車分野でも九州には魅力的な企業・人材がある。九州の企業が（タイに進出するなら）ビジネスしやすい環境を約束する」

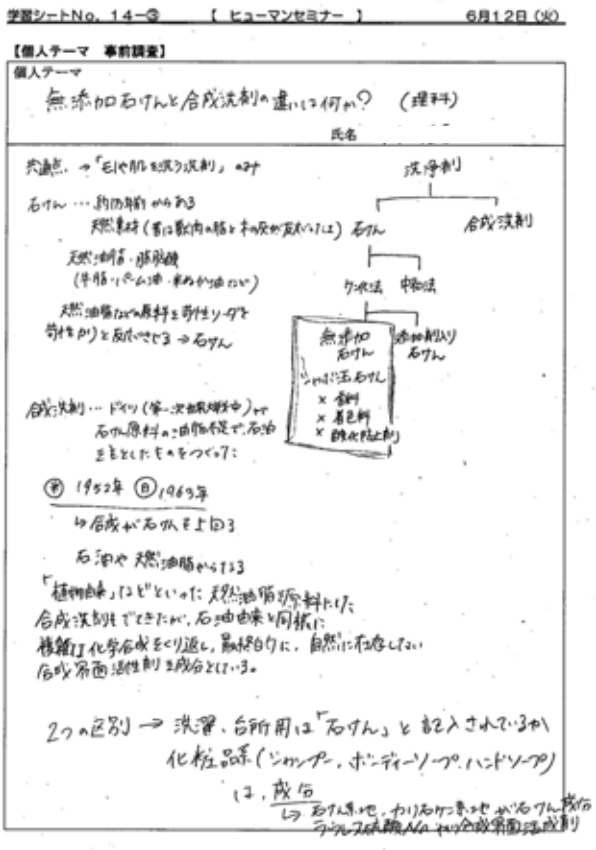
×　×

タイは投資誘致の経済再興に向け、高度な技術を有する海外の中小企業からの投資を促す施策を進めている。日本アセアンセンターとBOI主催の投資現地視察プログラムに参加し、現状と展望を探った。（九州支社担当・長谷部）

図１　訪問先である安川電機のロボットについて伝える記事（西日本新聞 2018. 5. 2）

（２）各教科の視点をもった学習旅行個人テーマの設定と調査活動

前述のように，これまでのヒューマンセミナーでは，「自己の生き方を考える」ということに比重が置かれ，生徒の興味関心に合わせた課題設定や追究が不十分であった。そこで本研究は生徒の関心に合わせ，教科の視点をもたせながら学習旅行における個人テーマを設定させ，調査活動を行うものとした。例えば，学習旅行の中のプログラムの一つに，無添加石けんを製造・販売する「シャボン玉石けん」の社長の講演会があるが，無添加石けんについて理科的な見方・考え方を働かせながら「科学的にどのような手順で製造しているか」といった個人テーマを設定させ，予備知識を得た上で講演を聞くと，より社長の考え方や生き方に迫ることができると考えられる。自分のこれまでの教科学習を振り返り，興味関心にあわせて個人テーマを設定し追究していくことで，学習旅行での学びがさらに深まることを狙った。尚，本研究において関連性のある教科としては，訪問する学習地や講師の方々の現状から，理科（無添加石けんについて，合成洗剤が環境に及ぼす影響など），


学習シートNo. 14－③　【 ヒューマンセミナー 】　6月12日（火）

【個人テーマ　事前調査】

個人テーマ

無添加石けんと合成洗剤の違いは何か？　（理科）

氏名

洗浄剤

石けん

合成洗剤

無添加石けん

添加剤入り石けん

シャボン玉石けん

× 香料

× 着色料

× 酸化防止剤

合成洗剤…ドイツ（第一次世界大戦中）で石けん原料の油脂不足で、石油を主としたものをつくった。

1952年　1969年

合成が石けんを上回る

石油や燃料油からなる

「植物油」などといった天然油脂原料にた合成洗剤でできたが、石油燃料同様に機械化学合成をくり返し、最終的に、自然に存在しない合成界面活性剤主成分としている。

2つの区別 → 洗濯、台所用は「石けん」と記入されているが化粧品（シャンプー、ボディーソープ、ハンドソープ）は、成分

図２　生徒が立てた個人テーマと事前調査

社会科（北九州市の環境改善への取り組み，民芸運動に関することなど），美術科（焼物を鑑賞する視点，焼物の技法など）などを想定した。このような調査活動を経て訪問地での学習を行うこととした。

（３）学習旅行の学びの成果の新聞紙面での発信

昨年度の国語科の学習において，生徒は意見文を書き，それを岩手日報社に投書し，「声」「日報論壇」に採用された。これは，新聞を読みそこから自分の興味関心に合わせて記事を選び，それに対する意見を書いて投書するというものであった。

日報論壇

かなえたい夢や達成したい目標があるとき、その夢や目標に向かって努力をしたり、行動を起こすことは、当たり前のことだ。

では、その夢や目標と関係のないことは、おろそかにしてもいいのだろうか。私はそうは思わない。どんなことでも、できることは精いっぱい取り組むべきだ。

正月に行われた箱根駅伝で、青山学院大学が４連覇をしたことは知っているだろう。青学を４連覇に導いた原晋監督は、選手としては大成せず営業職での実績を残している。そこで身につけた発信力を生かし、監督になってから14年で箱根駅伝の「全国化」などを積極的に提言している。

「全力」未来につながる

最近では、目立つことをいとわずテレビ番組に出演している。原監督は、そこで司会者たちから話術を学び、選手にわかりやすい指導をすることに生かしている。

しかし、何でも全力でやる必要はないと思う人もいるだろう。部活で結果を残したいと思えば、勉強よりも部活を優先させるはずだ。そうすれば、練習時間は増え、優勝に近づくだろう。

ただ、部活を頑張ることは、勉強をしなくていい理由にはならない。私は、疲れた中で勉強をやり切る力が大会で最後まで戦い抜く力につながると思う。勉強を途中で投げだすような人は、部活でもその甘えが出てしまうだろう。

また、外出先で自分は客だからとマナーを守らない人もいるが、それも違うと思う。自分の目的が達成されればそれでいいというわけではない。マナーを守ることは人として当たり前のことだし、社会に出た時に大切になる。

勉強にしろ、マナーを守ることにしろ、その夢や目的が達成された「先」につながっている。今、全力で取り組んだことは、どんな形にしろ将来につながっているのだ。

私が精いっぱい取り組んだと言い切れることは、どれくらいあるだろう。それを言い訳におろそかにしてきたことは、きっと山ほどある。身近なことでも、もっとしっかり取り組めることはたくさんあるだろう。気付いていないだけで、まだまだ自分には足りないことだらけだ。

だから、自分の行動と将来を見つめ、どんなことでも精いっぱい取り組むべきだと思う。

（盛岡市　中学生　14歳）

図３　２年次に岩手日報社の「日報論壇」に掲載された生徒作品（岩手日報 2018. 3. 27）

生徒はそれまで校内新聞において自分の意見を発信してきたが，この言語活動によってさらに視野を広げて県内に自分の考えを発信することに面白さを感じる生徒が多くなった。より多くの人々に向けて発信するため，これまで以上に文章の構成を意識したり，自分の意見の根拠を吟味したりするなど，より相手意識をもった意見文を書くことができたように思う。

この学習を踏まえ，今回は学習旅行で学んだ成果を，岩手県民に発信するという言語活動を設定した。西日本新聞社のＮＩＥコーナー「こどもタイムズ」をヒントに岩手日報社の協力を仰ぎ，紙面一面分に今回の学習旅行の学びを掲載していただくことにした。その紙面一面をどのように構成するか，協働的な思考を通して生徒に検討させた。２年次の意見文の投書は，一つの記事単体で相手に自分の考えを伝えるものだが，今回は複数の記事を組み合わせて紙面として考えを発信することになる。読み手がどのようなことを知りたいかを考えさせながら，どのような内容を，どのような形式で，どのように表現して編集し発信するかを検討させた。

こどもタイムズ

平和な古里をつくるために

図４　参考にした西日本新聞社の「こどもタイムズ」（西日本新聞 2018. 5. 1）

（４）（１）～（３）を包括した教科横断的な単元デザイン

これまでに述べた（１）～（３）の方法を用い

て単元づくりを行い，実際に学習活動を行った。実際の単元計画は以下の通りである。

時	ねらい	主な学習活動
1	単元の見通しの把握 （国語・総合）	○　２年次の学習を想起する。 ○　学習の見通しをもつ。 ○　学習旅行個人テーマを設定する。
2	個人テーマの追究① （総合）	○　西日本新聞やインターネット等を用いながら個人テーマの解決に迫る。
3	個人テーマの追究② （各教科）	○　各教科の視点から，それぞれの講師について説明を受けたり質問をしたりする。
4	個人テーマの追究③ （総合）	○　学習旅行に行き，現地の情報を集める。
5 6	新聞メディアの特徴の理解 （国語）	○　「いつものように新聞が届いた――メディアと東日本大震災」を読み，新聞メディアの特徴を理解する。
7	新聞記事の形式の理解 （国語）	○　新聞を読み，新聞にはどのような記事がありどのような形式で書かれているかを分析する。 ○　自分たちのグループの新聞の紙面構成を検討する。
8	紙面構成の決定 記事内容の決定 （国語）	○　紙面構成をグループで検討する。 ○　記事の形式を検討する。
9	下書き （国語･各教科）	○　編集会議をもとに，記事の下書きを書く。 ・　自分の記事の役割 ・　情報や内容の正確性 ・　主張と根拠の整合性
10	紙面構成･記事の内容の再検討 （国語）	○　記事を読み合い，紙面構成や記事の内容を再検討する。 ・　内容・表現の重複 ・　体験と知識のバランス ・　岩手の中学生として ○　自分の記事を書き直す方向性を確認する。
	（夏季休業）	○　前時の授業を受けて学んだ視点に沿って記事を書き直す。 ○　記事を仕上げる。
11 12	清書 （国語）	○　協働して一面を完成させる。 ・　記事の推敲 ・　タイトルの検討 ・　清書
13	振り返り （国語）	○　互いの紙面を読み合う。 ○　学習を振り返る。 ○　新聞社に投書する。

第１次では，２年次での学びを想起させ，学習旅行での学びを様々な新聞メディアに発信することを伝え，学習の方向性を確認した。そして，前述のように個人テーマを定め，学習旅行に向けた調査活動において西日本新聞を活用し，訪問地や講師の方々の情報を集めさせた。

第２次前半では，まず学習材である「いつものように新聞が届いた――メディアと東日本大震災」（東京書籍　「新しい国語３」）を読み，新聞というメディア，また全国紙や地方紙の特徴をおさえさせながら新聞の記事にはどのような形式があるかを分析させた。また，新聞社の，読み手が欲している情報を届けようとする思いを捉えさせた。

第２次の後半では，グループで協働しながら編集会議を行い，新聞記事を書き進めさせた。このとき，５人グループを編集し，編集会議を行わせた。この５人グループは，前述の教科の視点を意識した個人テーマのバランスを見ながら偏りなく構成させた。編集会議での検討の視点としては，

どのように記事を配置するか，どのような形式を選ぶか，記事にするときに相手意識をもちながらどのような情報を盛り込むべきかなどである。尚，個人で分担した記事を書く際に，その記事の妥当性や根拠を検討するにあたり，各教科の指導者から指導・助言を行い，記事の内容に説得力をもたせた。

図５　美術科担当教諭による助言の様子

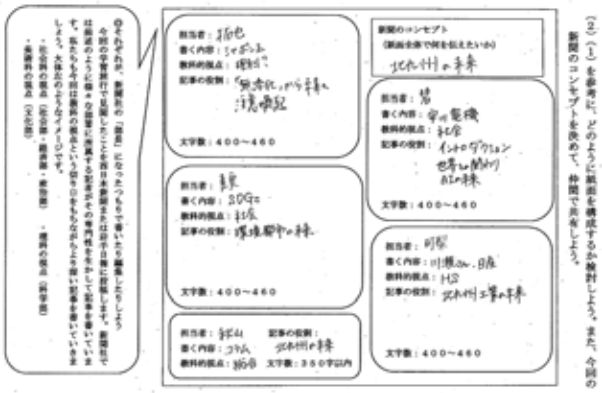


図６　編集会議を経た記事の配置や分担を記した学習シート

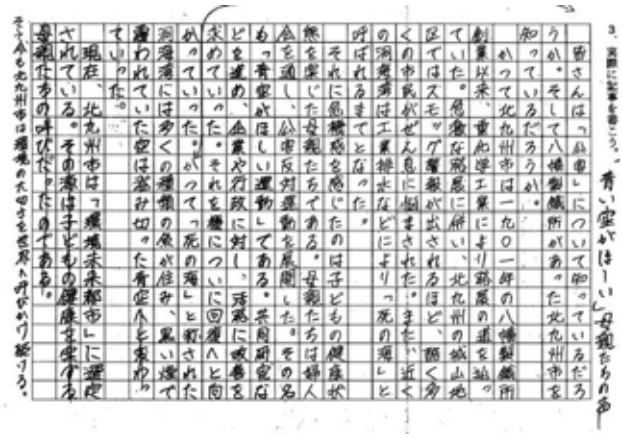


図７　編集会議を経て書いた新聞記事

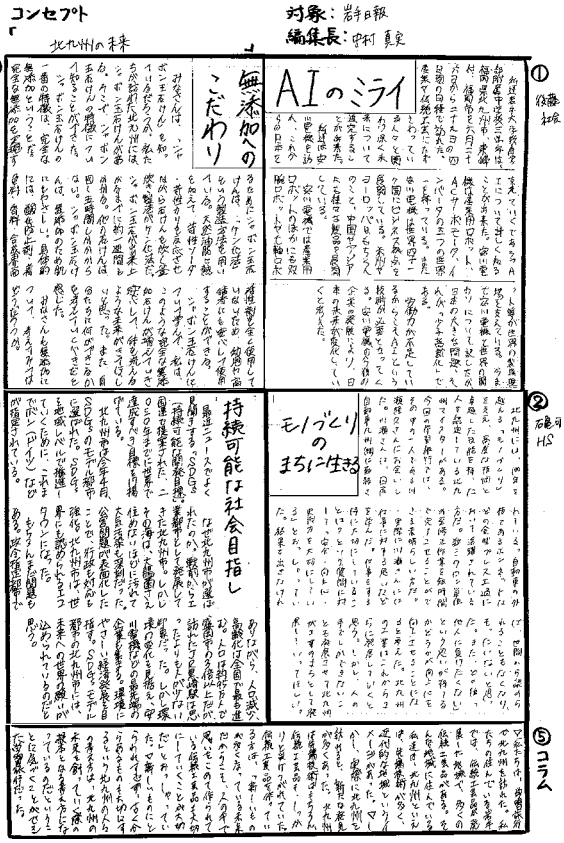


図８　それぞれの生徒が書いた記事をあわせた紙面

生徒が仕上げた紙面を見てみると，記事単体としては相手に伝わる内容であっても，紙面として推敲するといくつかの課題が見られた。生徒は普段の生徒会活動で班新聞を書いているが，その特性から自分の考えを書くことが多い。今回の実践においても，自分の考えを書く生徒が多く，紙面一面が意見文で占められるものがあった。そこで，実際の新聞の紙面を取り上げ，一つのニュースを取り上げる際には，様々な切り口から記事を書いているということ，新聞がニュースを伝えるという性格上客観的な記事が多く見られるが，専門家の考えを載せたり，社説に新聞社としての考えを載せたりして紙面としてバランスをとっていることに気づかせ，改めて編集会議を行い，推敲させた。

第３次では，これまでの編集会議や推敲作業を経て実際に記事を書き直した。そして，互いにできた新聞紙面を読み合い評価し合い，新聞記者の協力を仰ぎながら編集作業を行った。

チャレンジNIE
Newspaper in Education
新しい社会 どう生きる
未来新聞
岩手大付属中 福岡で学習旅行
環境の大切さ実感
無添加せっけんに学ぶ
伝統に未来のヒント
小石原焼窯元の魅力
人と機械、共存考える
社会に役立つ用途大事
仲間が財産
古里見つめるきっかけに
「働く」を自覚／信念貫き努力／読み手を意識／意見伝えたい／異なる伝え方
NIEいわて

図９　実際に岩手日報に掲載された「未来新聞」（岩手日報 2018. 10. 31）

４．成果と課題

ヒューマンセミナーのねらいである人間としての生き方を考えるために，講師についてその生い立ちについて調べるだけではなく，それを取り巻く社会状況や環境などを教科の視点をもたせながら調査させることで，講師の生き方についてより深く迫ることができたと同時に，教科の学びが実社会に生きていることを実感させることができたように思う。また，国語科の「書くこと」学習が，総合での学びを表出する・まとめる活動に生きたこと，そして自分の考えを県内に発信できたことは生徒にとっても書く喜びを実感できたように思う。これまで，ヒューマンセミナーの学びの成果は論文集という形でまとめていたが，学校の外に発信できたことは大きな成果であった。

課題としては，他教科との連携をより効果的に効率的に行う方法である。今回は，総合の学習の時間に，１時間に学年の教員と他教科から４人の教師を入れて授業を行っているが，時数の確保や効率という点では難しさを感じた。総合を軸として，他教科の年間計画と併せながらどのように学習活動や学習内容を配置していけばよいか，カリキュラム・マネジメントの視点で授業を構築していく必要を感じた。

また，生徒の個人テーマの設定の仕方にも課題が見られた。講師の生き方により深く迫るために個人テーマを設定させたが，課題解決に向かうのが非常に困難なものや，インターネット等で調べればすぐに答えが出るようなものが多く見られた。現地に行かなければ答えが出ないようなものや，講師の生き方をより深く知るための個人テーマが設定できなかった。学習指導要領にある，「実社会や実生活の中から問いを見いだし，自分で課題を立て」る力，すなわち課題設定力を他教科と関連させながらどのように育んでいくかがこれからの課題となる。

謝辞

本研究にあたっては，岩手県ＮＩＥ協議会事務局，岩手日報社編集局・読者センターの礒崎真澄様にたくさんのご指導を頂いた。また，本研究の構想にあたり，西日本新聞社・販売局企画開発部兼・こどもふれあい本部の白土靖様にもたくさんのご支援・ご指導を頂いた。この場を借りて感謝申し上げる。

引用文献

１）木村義輝他（2018）各教科・領域等の研究　総合的学習の時間，岩手大学教育学部附属中学校研究紀要，pp. 184
２）文部科学省（2018）中学校学習指導要領，pp. 144
３）中村正成（2018）新聞で発信しよう，私たちの声．第 23 回ＮＩＥ全国大会盛岡大会資料集．岩手日報社，pp. 38-43
４）タイ経済再興への道（2018. 5. 2）西日本新聞
５）日報論壇（2018. 3. 27）岩手日報
６）こどもタイムズ（2018. 5. 1）西日本新聞
７）チャレンジＮＩＥ（2018. 10. 31）岩手日報